

主 題：私たちが愛し仕えるべき者たち

聖書箇所：コリント人への手紙第1 4章1－5節

このコリント人への手紙から、私たちはいつか必ず神の前に立つときが来る、神のさばきがあることをこれまで何度か学んできました。神が下されるさばきは必ずしも「人を永遠の地獄に送る」ものばかりではありません。パウロがこの手紙の後に送ったコリント人への手紙第2の5章では、私たちクリスチャンに対するさばきについて教えています。5：10「**なぜなら、私たちはみな、キリストのさばきの座に現われて、善であれ悪であれ、各自その肉体にあってした行為に応じて報いを受けることになるからです。**」なぜパウロは、クリスチャンのさばきについて何度も語ったのでしょうか？コリント教会が靈的に幼い状態であったため多くの問題を抱えていたこともありますが、なによりも一番大きな動機は、パウロがコリント教会の人々を愛していたからです。彼は多くの労力を費やして何度も手紙を書き、何度も使いを送ったり、またパウロ自身も3度訪問しているのです（Ⅱコリント13：1「**私があなたがたのところへ行くのは、これで三度目です。**」）。コリント教会はパウロの伝道によって建てられた教会です。初めの訪問の時には約1年半滞在したことが使徒の働き18：11に記されています。「**そこでパウロは、1年半ここに腰を据えて、彼らの間で神のことは教え続けた。**」。パウロは自分の愛していたコリント教会の人たちが、神の前に正しい歩みをすることによってほんとうに価値ある祝福に満ちた人生を送ってくれることを願っていましたから、このように度々の訪問や手紙によって彼らを教え導いていったのです。

私たちがクリスチャンが覚えておくべきこと

今日の箇所から、「私たちが覚えておくべき大切なこと」を学んでゆきましょう。それによって、パウロがコリント教会の人たちに伝えたかったことを知り、今の私たちももっと神の前になすべき正しいことを知ることができるようになるためです。

I. 私たちは神に仕えるものとされた 1節 a

「**こういうわけで、私たちを、キリストのしもべ、…**」

まずここで、パウロは自分たちが「神に仕える者」とされたのだと教えます。この「私たち」とは誰を指すのでしょうか？すぐ後の6節にこのようにあります。「**さて、兄弟たち。以上、私は、私自身とアポロに当てはめて、あなたがたのために言って来ました。**」とパウロは言います。1－5節のことはパウロとアポロに関して言ってきたと。だから「私たち」とは「パウロとアポロ」のことです。

◎「キリストのしもべ」とは？

また、パウロとアポロは「キリストのしもべ」だとありますが、「しもべ」ということばには深い意味が込められています。ギリシャ語で「しもべ」や「奴隷」、「はしため」というような人や状態を表わすことばは幾つかありますが、パウロがここで使っている「しもべ」は新約聖書では20回しか使われていないことばです。これは具体的な職業（「船の漕ぎ手」や「使用人」「家来」など）ではなく、状態を指す場合に使われていることばで、非常に稀なことばです。このことばの元は、三段オールのカレー船の漕ぎ手を指し、その「最も下の層の漕ぎ手」のことです。特に「仕える」ということが強調されているのです。

つまり、パウロはここで、自分たち教師や教会のリーダーたちは、キリストに仕える者たちの中でも最も「仕える」ことを実践している者だということを訴えているのです。彼らの教会での働きの中では「仕える」という資質が求められるのです。イエスは弟子たちに対してこのように言われました。ルカ22：26「**だが、あなたがたは、それではいけません。あなたがたの間で一番偉い人は一番年の若い者のようにになりなさい。また、治める人は仕える人のようでありなさい。**」。また、パウロはこのようにも話しています。Ⅱコリント4：5「**私たちは自分自身を宣べ伝えるのではなく、主なるキリスト・イエスを宣べ伝えます。私たち自身は、イエスのために、あなたがたに仕えるしもべなのです。**」、コロサイ1：25「**私は、あなたがたのために神からゆだねられた務めに従って、教会に仕える者となりました。神のことは余すところなく伝えるためです。**」と、「あなたがたに仕えるしもべ」「教会に仕える者」という表現は、前回学んだⅠコリント3：22のみことば「**パウロであれ、アポロであれ、ケパであれ、また世界であれ、いのちであれ、死であれ、また現在のものであれ、未来のものであれ、すべてあなたがたのものです。**」とあるとおり、自分もアポロもケパもすべて、あなたがたコリント教会の必要のために神が備えてくださったものだというのです。このように聖書が教える「仕える」という意味は、「何でも言いなりになって動く」というのではなく、「相手の必要を覚えてそのために労する」ということです。実際、イエスがそのとおりでした。イエス

がこの地上に来られた目的は「仕える」ためでした。マタイ 20 : 28 「**人の子が来たのが、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためであるのと同じです。**」と、イエスは当時の人々の必要を覚えて、人々を教え、病を癒し、そして、私たちを罪から解放するために自ら十字架にかかってくださったのです。イエスが多くの迫害に会われたように、特にこの当時、パウロがこの手紙を書いた頃は、神に仕え、人に仕えることには大変な犠牲が伴いました。そして、キリストを信じるその信仰のゆえに殉教していった人たちは、このような教会のリーダーや教師たちだったのです。これは、ガレー船の最下層の漕ぎ手が最も大変な働き手であるにも関わらず、船が沈没したときには真っ先に海に投げ出されてしまう、それと同じであると言えます。

◎ここで、パウロはどのような問題の対処しようとしているのでしょうか？

それは「分裂分派」の問題です。4章の初めは「こういうわけで、」ということばで始まっています。これは前の章までのことを受けて続けて行くのですが、それらはすべて、コリント教会にあった問題、「分裂分派」に関するものでした。つまり、パウロはここでこのように訴えるのです。「教会のリーダー、教師として働く私たちはコリント教会のために仕え働いているのに、あなたがたは私たちのことで言い争って、だれにつくかと分裂分派を引き起こしている」と。パウロやアポロ、またケパの間には何のわだかまりも分裂もありませんでした。パウロたちは自分たちの名前が挙げられて、コリント教会内に分裂分派があることさえ知らなかったのです。すべてコリント教会の人たちの勝手な自己主張だったのです。彼らは大きな間違いを犯していました。クリスチャンとはもうこの世のものではありません。すべて「神に仕える者」です。パウロはこの4 : 6以下でコリント教会の人たちを非難しています。あなたがたは高慢になっている、強く賢い者になっていると。しかし、その後14節からは調子が変わり、「**私がこう書くのは、あなたがたをはずかしめるためではなく、愛する私の子どもとして、さとすためです。**」と言い、16節には「**ですから、私はあなたがたに勧めます。どうか、私にならう者となってください。**」と続きます。

「神に仕える」という特徴は教会のリーダーや教師たちだけの資質ではありません。すべてのクリスチャンが実践すべきことです。パウロの願いは、「自分たち教師とあなたがたに何の違いもないはず、だから、どうか私たちと同じようになってください」ということでした。イエスも教えておられます。マタイ 6 : 24 「**だれも、ふたりの主人に仕えることはできません。一方を憎んで他方を愛したり、一方を重んじて他方を軽んじたりするからです。あなたがたは、神にも仕え、また富にも仕えるということとはできません。**」と。パウロも人が救われることをこのように表現しています。Iテサロニケ 1 : 9 「**私たちがどのようにあなたがたに受け入れられたか、また、あなたがたがどのように偶像から神に立ち返って、生けるまことの神に仕えるようになり、**」と。ペテロもIペテロの手紙 4 : 10で「**それぞれが賜物を受けているのですから、神のさまざまな恵みの良い管理者として、その賜物を用いて、互いに仕え合いなさい。**」と言っています。このようにクリスチャンは神と人ともに仕えるべき者なのです。しかし、コリント教会の人たちは「高ぶり」のゆえに教会を利用し、教会内に様々な混乱を招いていたのです。

私たちはどうでしょう？教会のリーダーに対して神が教えるように正しい態度を持っているでしょうか？コリント教会と同じように、自分自身の勝手な基準や好き嫌いによって「私はこの人は認めるが、あの人は認めない」とか「この人には従うが、あの人には従えない」、「この人は尊敬するが、あの人は尊敬しない」というようなことがないのでしょうか？もしこの通りなら、私たちも分裂分派を作ったコリント教会の人たちと何ら変わらないのです。これは「神に仕えている」のではなく「神の命令に逆らっている」のだということを感じるべきです。私たちは神のみこころによって与えられたリーダーを愛し、尊敬し、従って行くことが教えられているのです。コリント教会が一部の人たちの問題によって大きく混乱したように、私たちの選択（＝決断）によって、教会全体が影響を受けるのだということを感じておかななくてはなりません。神の祝福は私たちの選択にかかっているのです。

II. 私たちは神のメッセージを託された者 1 - 2節

「**私たちを…また神の奥義の管理者だと考えなさい。**」

◎神の「奥義」とは？「ミステリー」の語源でもあります。

以前は隠されていたものが明らかにされたもの、これが「奥義」です。この「奥義」とは英語の「ミステリー」の語源にもなったことばです。これがどのように使われているかを見ましょう。エペソ 3 : 5 「**この奥義は、今は、御霊によって、キリストの聖なる使徒たちと預言者たちに啓示されていますが、前の時代には、今と同じようには人々に知らされていませんでした。**」とかつて旧約の時代には隠されていたということです。また、ローマ 16 : 25には「**私の福音とイエス・キリストの宣教によって、すなわち、世々にわたって長い間隠されていたが、今や現わされて、永遠の神の命令に従い、預言者たちの書によって、信仰の従順に導くためにあらゆる国の人々に知らされた奥義の啓示によって、あなたがたを堅く立たせることができる方、**」とあります。つまり、かつては隠されていたものが後になって明らかにされた神からの啓示＝メッセージがこ

の「奥義」なのです。もし、神がはっきりと示してくださらなかったら、いったい誰が、救い主が自らのいのちを捨てて十字架にかかるなど、知ることができたでしょう？いったい誰が、一時はイスラエルの神であった「アブラハム、イサク、ヤコブの神」を世界中の人たちが信じ、礼拝するなど予想できたでしょう？いったい誰が、私たちの内に聖霊なる神が住んでくださって、私たちを導きキリストに似た者へと変えてくださるなど、考え付いたでしょう？いったい誰が、神が私たちをすべての罪から清め、純金や宝石でできた天に招いてくださると信じることができたでしょう？パウロやアポロはそのことを、コリントを初めとする様々な町へ行って伝えたのです。

◎神の奥義の「管理者」とは？＝「家令」「執事」「会計係」を指すことばです。

もう一つ注目したいことばは「管理者」です。このことばは、「家令」（家や財産の管理全般を司り、使用人を監督し、物資の支給・分配を行ない、一家全体を切り回した）や「執事」（家庭にあって主人に仕える）や「会計係」を表わすことばでした。彼らには大きな責任が与えられており、様々な実務の他、奴隷の管理までもが任されていたようです。つまり、使用人でありながら同時に、大きな責任が託されていたのがこの「管理者」なのです。確かに、パウロもアポロもその当時多くの人たちに、この神からのメッセージである福音を大胆に語る者たちでしたが、それは一部の人だけに託されたことでしょうか？神はこのメッセージをすべてのクリスチャンに託されてこのように命じられました。

マタイ 28：19－20 「それゆえ、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。そして、父、子、聖霊の御名によってバプテスマを授け、：20 また、わたしがあなたがたに命じておいたすべてのことを守るように、彼らを教えなさい。見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます。」

◎その管理者たちに要求されるものとは？＝神に対する「忠実さ」です。

2節、「このばあい、管理者には、忠実であることが要求されます。」とあるように、私たちクリスチャンには大きな責任が与えられていることをパウロはここで教えようとしています。神から託されているこの「大切なメッセージ」をどのように果たしてゆくのか？それを神は見ておられます。主人から「タラント」を預かったしもべたちのたとえ話があります。そこで彼らが主人から問われていたのは、タラント（＝財産）の量ではなく主人に対しての「忠実さ」でした。マタイ 25：20－23 「すると、五タラント預かった者が来て、もう五タラント差し出して言った。『ご主人さま。私に五タラント預けてくださいましたが、ご覧ください。私はさらに五タラントもうけました。』：21 その主人は彼に言った。『よくやった。良い忠実なしもべだ。あなたは、わずかな物に忠実だったから、私はあなたにたくさんの物を任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ。』：22 二タラントの者も来て言った。『ご主人さま。私は二タラント預かりましたが、ご覧ください。さらに二タラントもうけました。』：23 その主人は彼に言った。『よくやった。良い忠実なしもべだ。あなたは、わずかな物に忠実だったから、私はあなたにたくさんの物を任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ。』」

コリント教会の人たちは自分たちのリーダーを比較していました。アポロはかなり雄弁であったことが知られていますが、パウロについてはこのように書かれています。Ⅱコリント 10：10 「彼らは言います。「パウロの手紙は重みがあって力強いが、実際に会ったばあいの彼は弱々しく、その話しぶりは、なっていない。」、10：1には「さて、私パウロは、キリストの柔和と寛容をもって、あなたがたにお勧めします。私は、あなたがたの間において、面と向かっているときはおとなしく、離れているあなたがたに対しては強気な者です。」とありますが、これはパウロが反対者のことばを皮肉ってこのように言っているのです。コリント教会のリーダーに対する基準は、雄弁であるとか多くの知識があるとか、親しみやすいというような人間的な基準でした。パウロはこのようなコリント教会の様子を1：11、12に「実はあなたがたのことをクロエの家の者から知らされました。兄弟たち。あなたがたの間には争いがあるようで、：12 あなたがたはめいめいに、「私はパウロにつく。」「私はアポロに。」「私はケパに。」「私はキリストにつく。」と言っているということです」とあるようによく知っていたのです。このようなコリント教会に対してパウロは「神の前にそのような賜物や知識や人間的な基準は重要ではない！大切なのは神に対していかに忠実であるかどうかであり、それこそが問われるのだ」と言うのです。コリント教会の人々はこの神への忠実さを欠いていたのです。

私たちの周りの人々への評価の基準はどうでしょう？神に対する忠実さでしょうか？それとも「あの人は自分のことをよく分かってくれる、あの人はこんなことができる」といった世的な基準で人を見ていないでしょうか？大切なことは、まず自分自身が神の基準＝忠実さをもって日々の信仰生活を歩んで行くことです。それを神は見ておられるのです。

Ⅲ. 私たちは神によって評価される 3－5節

「：3 しかし、私にとっては、あなたがたによる判定、あるいは、およそ人間による判決を受けることは、非常に小さなことです。事実、私は自分で自分をさばくことさえしません。：4 私にはやましいことは少しもありませんが、だからといって、それで無罪とされるわけではありません。私をさばく方は主です。：5 ですから、あなたがたは、主が来られるまでは、何についても、先走ったさばきをしてはいけません。主は、やみの中に隠れた事も明らかにし、心の中のはかりごととも明らかにされます。そのとき、神から各人に対する称賛が届くのです。」

◎「しもべ」にも「管理人」にも主人がいます。

私たちには神こそが私たちの主人です。なぜなら、この神こそが今日私を生かし、私を「神に仕える者」として用いようと、すばらしい「神のメッセージ」を託して下さったからです。周りの人がどのように私を評価しようと、私たちを最終的に評価されるのは神だけです。

◎神のさばきは恵みです。

このようなさばき＝評価があることは実は感謝なことなのです。なぜなら、たとえ人から誤解されたとしても神はすべてご存じなのです。たとえ失敗したとしても神は正しく評価されます。もし、神のさばきがなかったら、どこに正しい評価があるのでしょうか？神の正しい評価によって、私たちは正しく歩んで行けるのです。私たちがいつか必ず、すべてをご存じである神の前に立つことを知らなかったら、日々の罪の誘惑に対して負けてしまわないでしょうか？私たちの心は弱いから、もし、神のさばきがなかったら、私たちの歩みは変わってしまうでしょう。神を愛し、神に喜ばれる者へと変えてくださるのは神です。この神に忠実に歩む者に「**神から各人に対する称賛が届く**」のです。あなたがすでに救われているクリスチャンなら神から称賛をいただくような歩みをするはずです。

すべてをご存じの神はこのように言われます。「安心なさい。わたしが終わりの日にあなたを正しく評価する」と。神のさばきがあること、それは神の恵みであり、私たちには「益」となっているはず